

平成 28 年 3 月 30 日

平成27年度総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 ※該当する()に ○を付ける	・海外共同 () ・共同研究 () ・個人研究 (○)	
研究代表者 (所属・職・氏名)	文芸学部 教授 村井 華代	
研究課題名	イスラエル演劇におけるパレスチナ問題	
研究分担者氏名	所属・職	役割分担
研究期間	平成 27 年 4 月 1 日 ~ 平成 28 年 3 月 31 日	
海外共同研究を実施することになった経緯 (海外共同のみ)		
研究発表(印刷中も含む)雑誌および図書		

研究実績の概要（1）

イスラエル演劇がパレスチナ問題（レバノン紛争、イスラエル・アラブとの共存問題含む）を劇化するときにどのように描いてきたか多角的に考察してきた。軸としたのは、以下の3項目である。

- 1) アッコー演劇祭訪問と観劇
- 2) パレスチナ問題を扱った戯曲の研究
- 3) パレスチナ問題と演劇についての先行研究の整理

アッコー演劇祭のはじまり（1980）は、パレスチナ問題に対するイスラエルの現代劇作家の態度の変化と切り離せない。パレスチナ人やイスラエル・アラブ人といった存在を、恐怖と敵意の対象としてではなく、むしろ逆にイスラエル・ユダヤというアイデンティティを形成する「他者」としてとらえ、劇のテーマ的存在、イスラエルの批判的共存者として描くことで、イスラエルの現代演劇は明瞭な変化を遂げた。そうした変化のプラットフォームとなったのが、「ハイファ市立劇場」や、アッコーフリンジ演劇祭の開催母体である「アッコー演劇センター」という、テルアビブやエルサレムと異なる北部の野心的な演劇人の活動拠点である。実際、2012年から見る限り、そこでアラビア語による演劇やパレスチナ問題が度外視されることはなく、ダヴィデの遺跡の上にある東エルサレムのアラブ系住民と右派ユダヤ人の対立を題材とした2012年の『シルワンの孔雀』（共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要 21号[2015]で取り上げている）や、検問所におけるイスラエル国防軍兵士と不当に足止めされるパレスチナ人の若い父親の不条理な対立を描く『サリーム・サリーム』（2014）等は高い評価を得ていた。

しかしながら2015年は、全国から審査によって選ばれたコンペティション参加作品の中に、アラブ系イスラエル人の目から見たパレスチナ問題を描く作品がなかった。それが単なる偶然なのかは不明であるが、アラブ系住民が多く、ユダヤ・アラブ共存のシンボリック存在であった都市アッコーにも「ユダヤ化」の傾向が顕著である現在、今後の展開を注視してゆかねばならない。

また2015年度は、(2)の一環として、80年代にはじまるこれらのパレスチナ問題の演劇化の中で際立った存在であるイエホシュア・ソボルの作品『パレスチナの女』（1985）を題材に、日本演劇学会分科会である西洋比較演劇研究会にて研究発表をおこなった。「ドラマ国家の未完のドラマ——イエホシュア・ソボル『シューティング・マグダ（パレスチナの女）』とイスラエル」と題して、2016年1月9日、成城大学にておこなったものがそれである。一つの統一された劇的行動（ドラマ）の結実としてのイスラエルというパースペクティブを批判するために、ソボルは抵抗のプロパガンダではなく、メタシアターによるアイデンティティの解体を導入する。テレビ用映画を撮影しているユダヤ系・アラブ系のイスラエル人たちが、それぞれの役作りに不平を言ったり、監督（ユダヤ系イスラエル人）の視点の偏向を批判したり、役に自分の意見を反映させるため強引な態度を見せたり、現実の映画製作現場にありがちな状況を展開する。ソボルは、それによって主人公であるアラブ系イスラエル人女性のアイデンティティの不統一なあり方を浮かびあがらせ、同時にイスラエルという国家の捏造された「統一」ぶりを批判している。

研究実績の概要（2）